デートDVの実態と心理的要因

～自己愛との関連を中心に～

松並　知子，青野　篤子，赤澤　淳子
井ノ崎敦子，上野　淳子

1．問　題

デートDVとは、（別れた恋人を含む）恋愛関係における二者の間の支配／被支配関係、虐待状況、主体性の侵害のことである（伊田、2010）が、近年、10代を含む若い世代での親密な関係における暴力が社会問題になっている。関西の高校生延べ10000人余りを対象に実施した調査によれば、「友達づきあいの制限やメールチェック」のような社会的暴力を受けた割合は女子32.9%、男子15.5%、「バカにする、傷つく言葉を言う、無視する」などの精神的暴力については女子27.3%、男子15.5%、「無理にキスやセックスをする」などの性的暴力は女子17.9%、男子８%、「たたく、ける、物を投げる」などの身体的暴力は女子15.2%、男子9.1%と報告されており（NPO法人女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ、2011）、高校生におけるデートDVが珍しいものではないことがわかる。

親密な関係における暴力の生起要因については、性役割や性差別主義態度といったジェンダー意識やパーソナリティ特性、文化・社会的背景など、多様な研究が実施されているが、特に心理的要因については相反する結果が見られることが多い。たとえば、DV経験の要因の1つとして自尊感情の低さが挙げられることが多いが（Dewhurst et al., 1992；Lewis et al., 2002；White et al., 2001）、その半面、自尊感情はDV経験とは関連が見られないという報告もあ

る（青野ら、2011；Katz et al., 2000）。このように実証研究においては結論は定まっていないが、多くの臨床家や支援者は、DV経験の背後にある心理的要因について言及している。たとえば、伊田（2010）は、デートDV加害者・被害者には、自己肯定感や自信のなさ、自分が嫌いという感覚が存在していることがあると指摘しているし、村本（2001）は、基本的信頼感にひびが入ることが絶望と結びつき、あえて虐待的な相手を選んでしまう場合もあると、DV被害経験の背後にある心理的要因について分析している。また吉岡（2007）は、被害を受けている女性には「別れるのはさみしい」という依存欲求や自分に対する自信のなさ、受動的・自己犠牲的なマゾヒズム傾向が見られるとしている。受動的・自己犠牲的なマゾヒズム傾向とは、虐待を受けることを好む傾向というわけではなく、自分自身の存在価値が感じられないために虐待的な関係を甘んじて受け入れてしまうというような態度であり、DVによって生じた二次障害的な特徴である場合も多いが、残念ながら暴力の正当化に利用されやすい。自己肯定感や基本的信頼感、自信、あるいはマゾヒズム傾向など多様な語彙が使われているが、それらの総称としては、自己愛という概念がもっとも適切であると思われる。

自己愛とは、自己を価値あるものとして体験しようとする基本的な欲求であるが、英訳するとSelf-loveとNarcissismという全くニュアンスの異なる言葉になる。一般的には、Narcissismと訳されることが多いが、本来の「自己を愛する」という意味を考えれば、むしろSelf-loveの方が意味が近いのではないか。Narcissism同様、Self-loveも日本語では「自己愛」と訳される場合がほとんどである。つまり、「自己愛」という日本語自体に、肯定的なSelf-loveと否定的なNarcissismが混在しており（老松、2001）、それによって、自己愛の問題がより見えにくく理解し辛くなっていると考えられる。Pulver（1970）は、自己愛には、防衛的なプライドに相当する「悪い自己愛」と非防衛的な自尊感情に相当する「良い自己愛」があり、前者は優越感や誇大妄想のような防衛的に肥大した自己尊重であるのに対し、後者は現実的で非防衛的な高度な自

尊感情であると指摘している。自己愛が1つのものなのか2種類に分類できるものなのかという議論に対しては、未だ定まった結論は出てないが、自己愛の表れ方には、健康的な表れ方と不健康な表れ方の2種類があると考えられる（松並、2006；三船、2010；中村、2004）。本研究においては、「真の意味で自分を愛する」という感覚、「自分は生きている価値がある」と思えるような自己への信頼を、自己愛の健康的な表れ方としてセルフ・ラブと定義する。また、セルフ・ラブが欠如または不足したことにより、過度に他者からの注目や賞賛を求めるなど不自然に自己が誇大している状態を、不健康な表れ方としてナルシシズムと定義する。Fromm（1939；1956）は、ナルシシズムとセルフ・ラブは全く別のものであり、セルフ・ラブが欠けている状態にあると、ナルシシスティックな利己主義や依存的な自己犠牲に陥ると説いた。「自分自身を価値があるものと思いたい」という欲求に対し、「心底から価値があると思えた」場合、その表れ方は健康的なものになり、「どうしても価値があると思えない」場合に、他者からの注目や賞賛を得るために他者を利用・搾取しようとしたり、他者に過度に依存するような不健康な表れ方をする傾向があるのではないだろうか。

セルフ・ラブの形成には子どもの頃の親子関係が影響を与えているという記述は多い。たとえば、Fromm（1939）は、セルフ・ラブを獲得する条件として「子どものときに他者から愛される経験をしたこと」を挙げている。また、忠井（2005）は、健康な自己愛の発展のためには親との適切な相互交流、他者存在としての両親の関与が重要であるとしている。また、子どもの頃の親子関係はデートDVの要因としても検討されており、幼少期の親の態度あるいは親との関係がDV加害経験に影響を与えることが報告されている（土肥、2005；Lewis et al., 2002；中村、2010）。以上のことから、子どもの頃の親との関係はセルフ・ラブにもデートDVにも影響をあたえていると考えられる。親との関係が直接デートDV経験に影響を与えているのか、あるいは、セルフ・ラブやナルシシズムを媒介として影響を与えているのか、それについて検

討することを本研究の目的の1つとする。

不健康な自己愛であるナルシシズムの極端な表れである自己愛性人格障害は、DVやセクシュアル・ハラスメント、性犯罪との関連が指摘されていることから（岡田、2005）、ナルシシズムがデートDVに影響を与えていることが推測される。また、自己愛と攻撃性や暴力性との関連はよく指摘されているが（Bushman & Baumeister, 2002；相良・相良、2006；湯川、2003）、現時点で、デートDVと自己愛の関連についての研究は非常に少ない。中島（2004）は，精神面および人間関係上の障害には，「自分はそのままでこの世界にいてもよい存在である」という健康的な自己愛の欠如が深く関連していると指摘している。この健康的な自己愛、つまり、セルフ・ラブが欠如した場合、女性の場合は、より依存的で執着的な対人行動に現れ、男性は、搾取・利用や権力への執着、リーダーシップなどに現れるとされており（Carroll, 1989）、極端な場合、他者からの賞賛や愛情を得るために、虚言を繰り返し誇大的な自己をアピールする、また他者をコントロールしようとしたり、暴力をふるったりする傾向があるとされている（松並、2008）。以上のことから、ナルシシズムやセルフ・ラブの欠如がデートDV被害・加害経験に影響を与えていると考えられる。

そこで、本研究の目的をデートDVと自己愛（セルフ・ラブ、ナルシシズム）、および子どもの頃の親子関係の関連の検討とする。幼少期の親との関係はデートDV経験に直接影響を与えていることも考えられるが、親との関係はセルフ・ラブと関連していることから、セルフ・ラブやナルシシズムを媒介して影響していることが推測される。また、セルフ・ラブの欠如がナルシシズムの増加と関連していることから、セルフ・ラブがナルシシズムに負の影響を与えていることが考えられる。さらに、セルフ・ラブよりもナルシシズムがDVや暴力性と関連していることが示唆されていることから、以下のような因果関係のモデルを仮定する。

過去の親子関係→セルフ・ラブ（基本的信頼感・対人的信頼感）→
ナルシシズム（注目賞賛願望）→デートDV被害・加害経験

2．方　法

調査対象者・手続き

2010年12月～2011年１月に、広島県、福井県、大阪府、京都府の大学・短期大学の授業を通して質問紙調査を実施した。回収した729人分のうち、過去に交際経験がないと回答したものや不備があったものを除き、535名（女性362名、男性173名）分を分析の対象とした。年齢の分布は18歳～26歳、平均年齢は20.07（$SD=1.17$）歳であった。

調査内容

⑴　**デート DV 被害・加害経験の有無**　小泉・吉武（2008）の研究に基づき、身体的・精神的・性的暴力を含む15項目について、それぞれ被害・加害経験があったかどうかを訊ねた。現在、恋人がいる場合は、現在の恋人との関係について、恋人がいない場合は、今まで交際してきた人の中で一番印象に残っている人との関係について、「いつも受けた」「数回受けた」「一回受けた」「受けたことがない」の４件法で回答を求めた。被害経験の各項目は表１に記載する。デート DV 加害経験については項目末尾を「～する」とし、「いつも行った」「数回行った」「一回行った」「行ったことがない」の４件法で回答を求めた。尚、調査対象者への配慮として、「もし答えたくない場合は回答していただかなくても結構です」と添えた。

⑵　**セルフ・ラブの測定**　自己愛の健康な表れ方であるセルフ・ラブの測定には基本的信頼感尺度（谷、1996）を用いた。基本的信頼感とは他者に対する正当な信頼感や自分は信頼に値する人であるという感覚を意味する（Erikson, 1959）。筆者の知る限り、セルフ・ラブそのものを測定する尺度は存在しないため、セルフ・ラブとほぼ同義であると思われる基本的信頼感を測定することで、セルフ・ラブの測定が可能であると考える。本尺度は11項目であるが、自分自身や人生に対する信頼感を測定する「基本的信頼感」（６項目）（「私は自分自身を十分信頼できると感じる」「人生に対して不信感を感じることがある

（逆転項目）」「失敗すると二度と立ち直れないような気がする（逆転項目）」など）と、現実の人間関係に基づく感覚を測定する「対人的信頼感」（5項目）（「自分が困った時には周りの人々からの援助が期待できる」「普通、人はお互いに誠実に関わり合っているものだと思う」など）の2つの下位尺度から成る（谷、1996；1998）。「とてもよく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法で回答を求めた。

(3) **ナルシシズムの測定**　自己愛の不健康な表れ方であるナルシシズムの測定には、自己愛人格目録（NPI：Raskin&Hall, 1979）の下位尺度の1つである「注目賞賛願望」（11項目）を用いた。NPIの下位尺度には「注目・賞賛願望」以外に、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」の3つの下位尺度があるが、「注目・賞賛願望」のみが自尊感情と負の相関を示すため（中村、2000；中村・松並、2001；松並、2006）、自己愛の不健康な表れ方であるナルシシズムの測定には適切であると考えられる。「私は人からほめられるのを望んでいる」「私は偉い人だといわれる人間になりたい」「私はうらやましがり屋だと思う」「私には、注目の的になってみたいという気持ちがある」などの項目からなり、「とてもよく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法で回答を求めた。

(4) **子どもの頃の親子関係の測定**　子どもの頃、親をどのように認知していたかを測定するために、親の養育行動尺度（笠井・岡田、2009）を使用した。父親・母親の養育行動尺度各17項目のうち、因子負荷量の高い項目を中心に10項目を選択した（「親は私をほめました」「親は私を好きだと言葉や態度で示しました」「私は親との間には、暖かさがあると感じました」「私は、何も悪いことをしていないのに親に叱られました（逆転項目）」など）。それぞれの項目につき、12歳頃までの親について、「いつもそうだった」「しばしばそうだった」「時々そうだった」「決してなかった」の4件法で回答を求めた。点数が高いほど、子どもの頃の親との関係が良好であると認知していることになる。

3．結　果

(1)　デート DV 被害・加害経験

デート DV 被害経験が全くない男性は19名(17.6%)、被害経験が一度でもある男性は89名(82.4%)であった。女性の場合、被害経験が全くない者は78名(33.8%)、一度でもある者は153名(66.2%)であった。また、デート DV 加害経験が全くない男性は35名(32.4%)、一度でもある男性は73名(67.6%)であり、加害経験が全くない女性は82名(35.7%)、一度でもある女性は148名(64.3%)であった。

項目別では、「腹を立てたとき、身体を掴んだり、叩かれたり、殴ったりされる」では、男性の13.9%、女性の3.0%が「数回～いつも受けた」、男性の10.2%、女性の7.4%が「数回～いつも行った」、また、「腹を立てたとき、目の前でものを投げつけたり壊したりされる」では、男性の8.3%、女性の4.8%が「数回～いつも受けた」、男性の9.2%、女性の2.6%が「数回～いつも行った」と回答しており、激しい身体的暴力の経験者は１割前後以下という結果が見られた。その反面、「冗談のつもりで、相手から軽く小突かれたり、蹴られたりする」という項目に関しては、男性の48.2%、女性の46.8%が「数回～いつも受けた」、また男性の38.9%、女性の46.1%が「数回～いつも行った」としている。また、「自分の意見や都合に合わないからといって、イライラをぶつけられたり怒ったりされる」という項目でも、男性の25.0%、女性は9.5%が「数回～いつも受けた」、男性の12.1%、女性の19.1%が「数回～いつも行った」と回答しており、DV と認知されづらいであろう攻撃行動は、日常的に行われていることが示唆された。

(2)　デート DV 被害・加害経験得点および性差の検討

デート DV 被害・加害経験尺度を便宜的に間隔尺度として扱い、被害もしくは加害経験が多いほど高得点とし、被害・加害経験全体および各項目の男女差について t 検定を行った（表１参照)。その結果、被害経験に関しては男性

が有意に高い得点を示した。項目別では、「腹を立てたとき、殴るフリをされる」「腹を立てたとき、身体を掴んだり、叩かれたり、殴ったりされる」「自分の意見や都合に合わないからといって、イライラをぶつけられたり怒ったりされる」の3項目について、男性>女性という結果が見られた。

加害経験については、「腹を立てたとき、大声で怒鳴る」「わざと嫌な呼び方で呼んだり、馬鹿にしたり、見下したような言い方をする」「断っても、無理矢理、キスしたり、身体を触ったり、抱きついたりされる」「断っても、無理

表1　デート DV 被害・加害経験尺度得点と男女差

	男性 (N=108)		女性 (N=231)	t 値
デート DV 被害経験全体	20.56 (6.91)	>	18.88 (4.59)	2.29 **
・冗談のつもりで、相手を軽く小突かれたり蹴られたりする	2.16		2.04	0.90
・腹を立てたとき、殴るフリをされる	1.39	>	1.16	2.59 *
・腹を立てたとき、目の前でものを投げつけたり壊したりされる	1.24		1.13	1.72
・腹を立てたとき、身体を掴んだり、叩かれたり、殴ったりされる	1.37	>	1.12	3.22 **
・腹を立てたとき、大声で怒鳴られる	1.34		1.21	1.68
・腹を立てたとき、すぐに別れ話を持ち出される	1.31		1.23	1.07
・腹を立てたとき、長い期間無視される	1.37		1.24	1.67
・行動を制限されたり、監視されたりする	1.42		1.26	1.71
・自分の意見や都合に合わないからといって、イライラをぶつけられたり怒ったりされる	1.61	>	1.29	3.18 **
・わざと嫌な呼び方で呼ばれたり、馬鹿にされたり、見下したような言い方をされる	1.25		1.33	1.02
・勝手に携帯の着信履歴や交友関係をチェックされる	1.33		1.26	0.82
・断っても、無理矢理、キスしたり、身体を触ったり、抱きついたりされる	1.35		1.29	0.70
・断っても、無理矢理セックスされる	1.15		1.11	0.66
・コンドームを使用する避妊や性感染症予防に協力してくれない	1.19		1.16	0.48
・嫌がっているのにポルノグラフィーを無理やり見せられたり、似たような行為を要求される	1.07		1.06	0.35

デート DV 加害経験全体	20.10 (7.23)		18.88 (5.24)	1.57
・冗談のつもりで、相手を軽く小突いたり、蹴ったりする	1.94		2.07	1.06
・腹を立てたとき、殴るフリをする	1.32		1.21	1.37
・腹を立てたとき、目の前でものを投げつけたり壊したりする	1.21		1.10	1.69
・腹を立てたとき、身体を掴んだり、叩かれたり、殴ったりする	1.26		1.19	0.96
・腹を立てたとき、大声で怒鳴る	1.48	>	1.27	2.20 *
・腹を立てたとき、すぐに別れ話を持ち出す	1.31		1.34	0.27
・腹を立てたとき、長い期間無視する	1.40		1.47	0.78
・行動を制限したり、監視したりする	1.20		1.21	0.13
・自分の意見や都合に合わないからといって、イライラをぶつけたり怒ったりする	1.38		1.50	1.28
・わざと嫌な呼び方で呼んだり、馬鹿にしたり、見下したような言い方をする	1.46	>	1.21	2.62 *
・勝手に携帯の着信履歴や交友関係をチェックする	1.18		1.22	0.62
・断っても、無理矢理、キスしたり、身体を触ったり、抱きついたりする	1.39	>	1.03	4.54 ***
・断っても、無理矢理セックスする	1.20	>	1.01	2.94 **
・コンドームを使用する避妊や性感染症予防に協力しない	1.14	>	1.02	2.65 **
・嫌がっているのにポルノグラフィーを無理やり見せたり、似たような行為を要求する	1.22	>	1.03	2.99 **

*$p<.05$ **$p<.01$ ***$p<.001$ カッコ内は標準偏差
得点範囲：「デート DV 被害・加害全体」15-60点
各項目 1-4点

矢理セックスされる」「コンドームを使用する避妊や性感染症予防に協力してくれない」「嫌がっているのにポルノグラフィーを無理やり見せたり、似たような行為を要求する」の６項目において、男性が女性よりも有意に高い得点を示した。山口（2003）の分類によれば、「腹を立てたとき、大声で怒鳴る」「わざと嫌な呼び方で呼んだり、馬鹿にしたり、見下したような言い方をする」の２項目は「言葉での暴力」に、それ以外の４項目はいずれも性的暴力に分類されることから、特に性的暴力の加害経験に関しては圧倒的に男性の方が多いこ

とが示された。

(3) 基本的信頼感尺度、注目賞賛願望尺度、親の養育行動尺度および性差の検討

セルフ・ラブを測定する基本的信頼感尺度11項目について因子分析（主因子法・promax 回転）を行ったところ、先行研究の結果同様、2 因子が見出された。先行研究にあったように、第 1 因子を「基本的信頼感（$\alpha = .76$）」、第 2 因子を「対人的信頼感（$\alpha = .76$）」として、以後の分析に使用する。

ナルシシズムを測定するための注目賞賛願望尺度11項目の信頼性係数は $\alpha = .82$であり、親の養育行動尺度10項目は $\alpha = .84$であった。いずれも十分な信頼性を有すると考えられる。

それぞれに尺度に関し、男女別に平均値を算出し、t 検定を行った（表 2 参照）。他者や人間関係に対する信頼感を表す「対人的信頼感」では、有意に女性が男性よりも高く、ナルシシズムを表す「注目賞賛願望」では、男性＞女性の有意傾向が見られた。また、過去の親子関係尺度では、女性が男性よりも有

表 2　各尺度の平均点と男女差

	男性（N=173）		女性（N=362）	t 値
基本的信頼感	17.59 (4.52)		17.29 (4.35)	0.73
対人的信頼感	17.2 (4.06)	<	18.19 (3.26)	2.81 **
注目賞賛願望	34.66 (7.98)	>	33.52 (7.15)	1.65 †
親の養育態度	28.17 (5.50)	<	31.17 (5.64)	5.80 ***

† $p < .10$　** $p < .01$　*** $p < .001$　カッコ内は標準偏差
得点範囲：「基本的信頼感」 6-30点
「対人的信頼感」 5-25点
「注目賞賛願望」11-55点
「親の養育態度」10-40点

意に高い得点を示したことから、女性の方が男性よりも子ども時代の親子関係を良好だったと認知している傾向が見られた。

(4) 基本的信頼感・対人的信頼感、注目賞賛願望および親の養育態度の関連

基本的信頼感、対人的信頼感、注目賞賛願望の各得点および親の養育態度尺度得点の間の相関係数を、男女別に算出したところ、表3のような結果が見られた。男女ともに、基本的信頼感、対人的信頼感と親の養育態度には有意な相関が見られたことから、予想通り、子どもの頃の親子関係はセルフ・ラブと関連していると考えられる。一方、注目賞賛願望と親の養育態度の間には相関が見られなかったことから、子どもの頃の親子関係が直接ナルシシズムに影響を及ぼすのではないことが推測される。また、女性の場合には、基本的信頼感と注目賞賛願望の間に負の相関が見られたことから、自分自身や人生への信頼感が欠落・不足していること、つまりセルフ・ラブの欠落とナルシシズムの間に関連があると考えられる。

(5) 基本的信頼感・対人的信頼感、注目賞賛願望、過去の親子関係とデート DV 被害・加害経験の関連

基本的信頼感、対人的信頼感、注目賞賛願望、過去の親子関係の各尺度得点

表3　基本的信頼感、対人的信頼感、注目賞賛願望および親子関係の相関係数

	対人的信頼感	注目賞賛願望	過去の親子関係
基本的信頼感			
男性	.33**	.051	.23**
女性	.43**	−.20**	.28**
対人的信頼感			
男性		.14	.31**
女性		−.09	.40**
注目賞賛願望			
男性			−.08
女性			−.04

** $p < .01$

とデート DV 被害・加害経験尺度得点の間の相関係数を、男女別に算出したところ、男性では有意な相関は見られなかった。女性では、基本的信頼感、対人的信頼感、および、過去の親子関係とデート DV 被害・加害経験には有意な相関は認められなかったが、注目賞賛願望とデート DV 被害・加害経験との間に有意な相関が見られた（それぞれ $r=.19$, $p<.01$；$r=.31$, $p<.01$）。子どもの頃の経験や自分自身や人への根本的な信頼感が、直接、暴力行為と関連するわけではなく、不健康な自己愛の表れであるナルシシズムが DV 被害・加害経験となんらかの関連があることが示唆された。

(6) デート DV 被害・加害経験に影響を及ぼす要因

男女ともに、過去の親子関係とデート DV との間に有意な相関は見られなかったことから、親の養育態度が直接デート DV 経験に影響を与えているわけではないことが示唆された。また、男女ともに、基本的信頼感・対人的信頼感とデート DV 経験の間に有意な相関が示されなかったことから、セルフ・ラブが直接、デート DV 経験と関連しているのではないと考えられる。以上の結果から、女性の場合は、過去の親子関係→セルフ・ラブ（基本的信頼感・対人的信頼感）→ナルシシズム（注目賞賛願望）→デート DV 被害・加害経験という因果関係が成り立つことが予測される。そこで、男女別に、それぞれ重回帰分析を行った。結果を図１、２に示す。男女ともに、過去の親子関係から基本的信頼感、対人的信頼感それぞれへの標準回帰係数が有意であった。また、基本的信頼感、対人的信頼感を独立変数とし、ナルシシズム（注目賞賛願望）を従属変数としての重回帰分析の結果は、女性のみが、弱いながらも有意な負の標準回帰係数が見られた。ナルシシズムからデート DV 被害・加害経験それぞれへの標準回帰係数は、女性の場合のみ有意であり、加害経験への影響がより強い傾向が見られた。

以上の結果から、女性の場合は、子どもの頃の良好な親子関係が基本的信頼感、対人的信頼感を形成する要因となり、自分自身や人生への信頼が欠如・不足することがナルシシズムを高め、ナルシシズムがデート DV の被害・加害

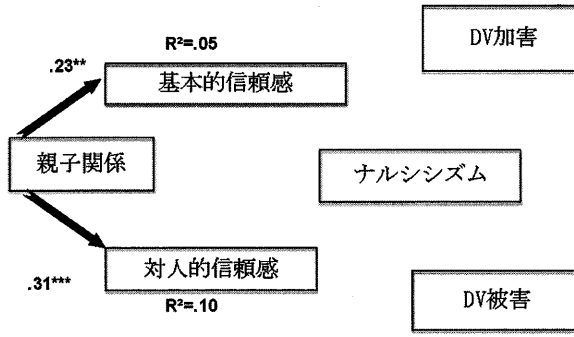

図１　パス解析の結果（男性の場合）

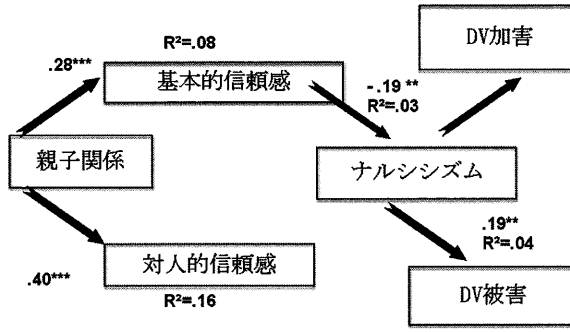

図２　パス解析の結果（女性の場合）

経験の要因となっていると考えられる。

４．考　察

(1)　デート DV 被害・加害経験および性差について

デート DV 被害・加害経験が一度でもある人は64.3%～82.4%であり、かなり多くの人が経験しているという結果が見られた。ただ、全体的に得点は低く、頻度は低いと考えられる。また「目の前でものを投げつけたり壊したりされる」「身体を掴んだり、叩かれたり、殴ったりされる」という激しい暴力の

経験者は1割前後であり、先行研究の調査結果とも一致する（松野・秋山、2009；森永ら、2011；Straus, 2008）。ただし、「冗談のつもりで、相手から軽く小突かれたり、蹴られたりする」「自分の意見や都合に合わないからといって、イライラをぶつけられたり怒ったりされる」という「軽い」暴力に関してはかなり多くの人が経験しており、言葉・態度での威嚇の経験者割合が高い（土肥、2005）という結果が見られた。最初は軽いレベルの暴力が相互作用により、より激しいレベルへとエスカレートしていき、最終的には死に至るような場合もありうる（Bookwala et al., 1992）し、身体的影響は少なくとも精神的には深刻な影響を与えている場合もあるので、「軽い」暴力だからといって容認されるべきではない。

男女差については、女性よりも男性の方が被害経験が有意に多いという結果が得られたが、先行研究においても同様の結果が見られた（Bookwala et al., 1992；松野・秋山、2009；森永ら、2011；White, 2009）。項目別に見ると、「腹を立てたとき殴るフリをする、イライラをぶつける、叩いたり殴ったりする」という自分の苛立ちや怒りを相手にぶつけることによって解消するという図式が見られ、女性も男性に対して身体的暴力をふるっていることが示唆された。女性の被害率が男性よりも高いという報告もあるものの（小泉・吉武、2008；李・塚本、2005）、男性がこれまで考えてきた以上に身体的暴力を受けていたり、人前で恥をかかされるなど、プライドを傷つけられるような暴力を受けているという指摘もあり（松野・秋山、2009）、男性が被害者で女性が加害者である場合のDVについての関心が高まってきている（Krahe et al., 2005）傾向が見られる。一方、「命の危険を感じたことがある」と答えたのは全員女性であったという調査結果（李・塚本、2005）や「男性から女性への暴力のレベルは非常に深刻である」と認知しているのは、男性よりも有意に女性が多いという報告もあり（Krahe et al., 2005）、女性が男性からの暴力を男性以上に脅威に感じていることが示唆されている。同じ暴力行為であっても、男女では被害の大きさや衝撃が違い、意味が異なっていることが考えられる（Bookwala et

al., 1992；森永ら、2011)。本調査においては、性的暴力や心理的暴力の被害に関しては有意な性差は認められなかった。男性が被害を受けたと認知している女性の身体的暴力にはどのような背景があるのであろうか。男性は恐怖を与えたり威圧するために攻撃する傾向があるが、女性は自衛のために攻撃するという説（White et al., 2001）がある一方、女性の暴力は自衛のためであるという言説は正しくなく（Straus, 2008)、怒りを身体的に表現する権利があると考えている女性は多く、相手の注目を引くために身体的暴力を行う女性もいる（Frieze, 2008）という指摘もあるため、今後、より一層詳細な調査が必要であると考えられる。

加害経験については、全体得点には有意差は見られなかったが、6項目で男性が女性よりも有意に高い得点を示した。松野・秋山（2009）の研究でも、精神的暴力、経済的行為、性的行為のいずれに項目でも、男性の方が女性よりも有意に加害経験が多かったとされているが、本研究においても、威嚇や嫌がらせ行為と性的暴力で有意に男性の加害経験が多かった。特に、性的暴力の加害経験は男性が有意に女性よりも多いことはこれまでにも報告されており（土肥、2005；小泉・吉武、2008；李・塚本、2005)、多くの国で共通する結果である（Chan et al., 2008)。携帯電話や交友関係のチェックなどの交友監視については、有意に女性の加害経験が多いという報告もあるが（小泉・吉武、2008；李・塚本、2005)、本研究では有意差は見られなかった。

(2) ナルシシズム、セルフ・ラブ、親の養育態度に関する性差

セルフ・ラブに関し、「基本的信頼感」では性差は見られなかったが、他者や人間関係に対する信頼感を表す「対人的信頼感」では、女性の方が有意に男性よりも高かった。松並（2011）では、基本的信頼感は男性の方が有意に高く、対人的信頼感は女性の方が有意に高いという結果が得られたが、本研究では対人的信頼感のみに有意差が見られた。基本的信頼感は抑うつ傾向や特性不安とより高い相関を示し、自分自身や人生への信頼感や同一性の感覚を表すのに対し、対人的信頼感は現実の人間関係に基づく感覚である（谷、1998）ことから、

女性は男性よりも、周囲に存在する他者に対する信頼感が強いことが示された。桑原（2002）は、自己愛と自己融和性の関連についての性差を検討した結果、男性では自己に対する自信が自己融和性と密接に関連しているのに対し、女性では、他者との関係を基盤とする自己肯定感がより重要であることを示唆しているが、今回の調査でも、女性はより他者との関係を重要視する傾向が見られた。

ナルシシズムを表す「注目賞賛願望」では、男性＞女性の有意傾向が見られた。自己愛に関しては男性の方がより強いという報告は多く、また、その表れ方が男女で異なるという指摘も見られる（小西ら、2008）。松並（2006）では、NPIの下位尺度のうち、「統率・指導性」に関しては男性の方が高い得点を示すが、「注目賞賛願望」を含むその他の下位尺度については性差は見られなかった。自己愛という概念が多様な要因を含むため、その表れ方に焦点を当てたより精密な研究が、今後必要とされるであろう。

過去の親子関係尺度では、女性が男性よりも有意に高い得点を示した。笠井・岡田（2009）によれば、女性は男性よりも父の情緒的温かみも拒絶も受けることが少ないが、母の情緒的温かみを受けることが多いとされているが、子どもの頃の親子関係で重要な役割を果たすのは母親の場合が多いため、母親からの影響を受けることが多い女性の方が「より良好だった」と認知しているのかもしれない。

(3) デートDV被害・加害経験に影響を及ぼす要因

男女ともに、子どもの頃の親子関係がセルフ・ラブ（基本的信頼感・対人的信頼感）に影響を与えているという結果が見られた。Erikson（1959）もFromm（1939）も、健康な自己愛を形成するためには子どもの頃の他者との関係が重要であると指摘しているが、本研究の結果においても、幼少時の親子関係がセルフ・ラブの形成に影響を与えていることが示唆された。

子どもの頃の経験や親子関係はDV経験にも影響をもたらすとされているが、今回の結果では直接的な因果関係は見られなかった。幼少時の親子関係が

良好でなかったこと自体が暴力の原因になるのではなく、その経験がセルフ・ラブやナルシシズムに影響を与え、パーソナリティを変容させることが暴力経験につながることが推測される。

デートDVの被害・加害経験に直接影響を与えている要因を検討したところ、男性では関連要因は見出せなかった。男性の方が調査協力者の人数が少ないということもあるが、自己申告制である質問紙調査の限界が原因であることも考えられる。また、男性のデートDV経験は女性とは異なる要因が関わっているのかもしれない。男性対象のメカニズムの解明は今後の課題である。女性の場合は、基本的信頼感がナルシシズムに負の影響を与え、ナルシシズムがデートDVの被害・加害経験に影響を与えているという結果が示された。先行研究でもセルフ・ラブとナルシシズムが負の相関を示すことが報告されており（松並、2006；高橋、2007)、セルフ・ラブの形成がナルシシズムの強さと関連していることが示唆された。実証研究としては、デートDV加害経験者と加害未経験者の間に自己愛の有意差は見られない（井ノ崎・野坂、2010）という報告もあるが、本研究では、決定係数は低いもののナルシシズムはデートDV経験に影響を与えているという結果が得られた。また、被害経験よりも加害経験により強い関連が見られたことから、女性においてもナルシシズムは攻撃性と関連していることが示唆された。

以上のように、女性の場合は、デートDVの背景にはナルシシズムやセルフ・ラブといった心理的要因、ひいては幼少時の親子関係が関連していることが示唆された。伊田（2010）や村本（2001）も指摘しているように、DVを防止するためには、単にコミュニケーション方法を指導したり、知識を伝えるだけでは不足であり、セルフ・ラブを育成するようなエンパワメント教育の必要がある。エンパワメントとは、他人を利用・搾取したり、依存することなく、自分も他人も尊重できる尊厳ある主体になるということである。また、一般に自己価値観が低いほどステレオタイプに自分を合わせることで、自分の価値を見出そうとする傾向があり（小柳、2003)、男らしさ・女らしさというジェン

ダー・ステレオタイプにとらわれる人ほど、DV の加害・被害経験に合いやすいといわれている。ステレオタイプにとらわれず自分らしく生きるためにも、真の意味で自分を愛せるようセルフ・ラブを育めるエンパワメントの視点をもったデート DV 予防教育やサポートが必要とされている。

今後の課題としては、男性のデート DV の要因の解明が挙げられる。本調査においては、加害経験も被害経験も有意に男性のほうが多かった。ナルシシズムは暴力性、攻撃性と関連しているとされているため、男性の加害経験にもナルシシズムが関連していると予測されたが、直接的な関連は見られなかった。男性の加害経験の多さは性的暴力で際立っていたが、性的暴力には他の暴力とは異なる要因が関連しているのかもしれない。他の要因が関連している、あるいは、他の要因を媒介している可能性も考慮し、より詳細な検討が必要であろう。また、女性の被害経験には、依存的・自己犠牲的なナルシシズムが影響していると考えられるが、男性の被害経験にはどのような要因が関連しているのであろうか。単に、行動として表面に現れた暴力だけでなく、加害者・被害者の関係性をも含む心理的影響を考慮したデート DV 経験を測定することで、デート DV の実態や背景をより明確にすることができると考えられる。心理的影響や心理的要因を含めたデート DV 被害・加害経験のメカニズムの解明が、今後ますます必要とされるであろう。

あとがき

本研究は仁愛大学共同研究費助成を受けて行われた。調査の実施とデート DV 被害・加害経験尺度の分析は共同で行い、それ以外の分析と執筆は第一著者が行った。本研究の一部は、第22回発達心理学会ラウンドテーブル（2011年３月25日、於東京学芸大学）、日本心理学会ジェンダー研究会公開研究集会「デート DV の加害及び被害の要因分析」（2011年３月25日、於仁愛大学）、および、日本ジェンダー心理学会（2011年９月10日、於同志社大学）において発表された。

引用文献

青野篤子・周玉慧・森永康子・葛西真記子　2011　日本と台湾の大学生における葛藤解決方略　黄自進（編）日本の伝統と現代（印刷中）

Bookwala, J., Frieze, I. H., Smith, C., & Ryan, K. 1992 Predictors of dating violence: A multivariate analysis. *Violence and Victims, 7(4),* 297-311.

Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. 2002 Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Research in Personality, 36(6),* 543-545.

Carroll, L. 1989 A comparative study of narcissism, gender, and sex-role orientation among bodybuilders, athletes, and psychology students. *Psychological Reports, 64,* 999-1006.

Chan, K. L., Straus, M. A., Brownridge, D. A., Tiwari, A., & Leung, W. C. 2008 Prevalence of dating partner violence and suicidal ideation among male and female university students worldwide, *Journal of Midwifery & Women's Health, 53,(6),* 529-537.

Dewhurst, A. M., Moore, R. J., & Alfano, D. P. 1992 Aggression against women by men: Sexual and spousal assault. *Journal of Offender Rehabilitation, 18.* 39-47.

土肥伊都子　2005　ドメスティック・バイオレンスの心理的過程に関する実証的研究　神戸松蔭女子学院大学研究紀要46, 17-39.

Erikson, E. H. 1959 Identity and the Life Cycle. International Universities Press.（小此木啓吾訳　1973『自我同一性』誠信書房）

Frieze, I. H. 2008 Social policy, feminism, and research on violence in close relationships. *Journal of Social Issues. 64(3),* 665-684.

Fromm, E. 1939 Selfishness and self-love *In 1994. Love, sexuality and matriarchy,* Rainer Funk via Liepman AG.（滝沢海南子・渡辺憲正訳　1997「利己心と自己愛」『愛と性と母権制』新評論 84-120.）

Fromm, E. 1956 The Art of Loving. Harper&Brothers.（鈴木晶訳　1991『愛するということ』紀伊国屋書店）

伊田広行　2010　デートDVと恋愛　大月書店.

井ノ崎敦子・野坂祐子　2010　中高生のいじめ及びデートDVの加害経験に関する一研究―被害経験、暴力容認度、及び自己愛との関連についての検討　日本＝性研究会議会報　22(1), 40-51.

笠井達夫・岡田涼子　2009　親の養育態度と青年の攻撃性との関係　徳島文理大学研究紀要78, 95-108.

Katz, J., Arias, I., & Beach, S. 2000 Psychological abuse, self-esteem, and women's dating

relationship outcomes: A comparison of the self-verification and self-enhancement perspectives. *Psychology of Women Quarterly, 24,* 349-357.

小泉奈央・吉武久美子　2008　青年期男女におけるデートDVに関する認識についての調査　純心現代　福祉研究，12，61-75.

小西瑞穂、山田尚登・佐藤豪　2008　自己愛人格傾向についての素因―ストレスモデルによる検討　パーソナリティ研究　17(1)，29-38.

小柳しげ子　2003　DVの心理構造とジェンダー　家族関係学　22，7-10.

Krahe, B., Bieneck, S., & Moller, I. 2005 Understanding gender and intimate partner violence from an international perspective, *Sex Roles, 52(11/12),* 807-827.

桑原晴子　2002「自己愛についての一考察」『京都大学大学院教育学研究科紀要』48，271-283.

李璟媛・塚本宣子　2005　ディティングDVに関する研究－大学生の実態調査に基づいて宮崎大学教育　文化学部紀要　芸術・保健体育・家政・技術13，1-18.

Lewis, S. F., Travea, L., & Fremouw, W. J. 2002 Characteristics of female perpetrators and victims of dating violence *Violence and Victims, 17(5),* 593-606.

松並知子　2006　現代社会における自己愛とジェンダー～テキスト分析と実証研究の統合の試み　大阪大学言語文化研究科博士学位論文（未公刊）

松並知子　2008　メンタルヘルスとジェンダー　青野篤子・赤澤淳子・松並知子（編）ジェンダーの心理学ハンドブック　ナカニシヤ出版　189-208.

松並知子　2011　自己愛の表れ方の性差～理想化と誇大感～　日本心理学会第75回大会論文集1288.

松野　真・秋山　胖　2009　若年層における特定異性間の暴力（dating violence）に関する研究　大学生を対象としたdating violenceに関する意識・実態について　生活科学研究，31，117-128.

三船直子　2010　自己愛スペクトル　理論・実証・心理臨床実践　大阪公立大学共同出版会.

村本邦子　2001　暴力被害と女性―理解・脱出・回復　昭和堂.

森永康子、Irene H. Frieze、青野篤子、葛西真記子、Manyu Li　2011　男女大学生の親密な関係における暴力　女性学評論25，219-236.

森永康子、Irene H. Frieze、Manyu Li、青野篤子、周玉慧、葛西真記子　2011　Dating violence of college students in Japan, Taiwan and the United States: A cross-cultural comparison，神戸女学院大学論集　58(1)，101-111.

中島啓之　2004　非行・犯罪領域におけるジェンダーとトラウマ　宮地尚子（編）トラウマとジェンダー　金剛出版　125-148.

中村晃　2000　自己愛と社会的スキル、および孤独感との関連　日本教育心理学会42回発表論文集　558.

中村晃　2004　健全な自己愛と不健全な自己愛　千葉商科大学紀要　42(1), 1-20.

中村晃・松並知子　2001　自己愛の適応・不適応と性役割の検討　大阪大学教育学年報 6, 255-266.

中村正　2010　親密な関係性における虐待・暴力と加害者臨床論　立命館産業社会論集 46(1), 139-153.

NPO法人女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ　2011　デートDV防止授業「対等な関係をつくるために」授業後のアンケート　http://dv-boushi.net/index.html　(2011年11月14日閲覧)

老松克博　2001　日本人と自己愛の問題　Asper, K. 1987　老松訳『自己愛障害の臨床』創元社 327-340.

岡田尊司　2005　誇大自己症候群　ちくま新書.

Pulver, S. 1970 Narcissism: the term and the concept. Journal of the American, *Psychoanalytic Association, 18,* 319-341.

Raskin, R., & Hall, C. S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports, 45,* 590.

相良陽一郎・相良麻里　2006　自己愛と攻撃性の関係について　千葉商科大学紀要　43(4), 37-59.

Straus, M. A. 2008 Dominance and symmetry in partner violence by male and female university students in 32 nations. *Children and Youth Review, 30.* 252-275.

忠井俊彦　2005　逃亡者たち―脱現実と自己愛の病理―　ミネルヴァ書房.

高橋美知子　2007　高校生の学校忌避感情と自己愛傾向、基本的信頼感との関連　カウンセリング研究　40(3).

谷冬彦　1996　基本的信頼感尺度の作成　日本心理学会第60回大会発表論文集　310.

谷冬彦　1998　青年期における基本的信頼感と時間的展望　発達心理学研究　9(1), 35-44.

White, J. W. 2009 A gendered approach to adolescent dating violence: Conceptual and methodological issues, *Psychology of Women Quarterly, 33,* 1-15.

White, J. W., Donat, P. L. N., & Bondurant, B. 2001 A developmental examination of violence against girls and women. In R. K. Unger (Ed.), *Handbook of the psychology of women and gender.* New York: John Wiley & Sons. (尾田貴子（訳）2004　女の子および女性に対する暴力の発達的検討　森永康子・青野篤子・福富護（監訳）女性とジェンダーの心理学ハンドブック　北大路書房, 406-421.)

山口のり子　2003　デートDV防止プログラム実施者向けワークブック　梨の木舎.
吉岡香　2007　デートDV被害女性の異性との関係性のあり方について　人間性心理学研究　25(2), 101-113.
湯川進太郎　2003　青年期における自己愛と攻撃性―現実への不適応と虚構への没入をふまえて―犯罪心理学, 41, 301-305.

Summary

Dating Violence among College Students: With a Particular Reference to Narcissism and Self-love

MATSUNAMI Tomoko, AONO Atsuko,
AKAZAWA Junko, INOSAKI Atsuko, UENO Junko

The reality of dating violence was investigated among Japanese female and male college students. As a result, 64.3-82.4% of students reported expressing or receiving violence more than once, although only about 10% reported expressing or receiving severe violence. As to gender differences, men received more violence from their partners than women did. Although there is no significant gender differences on the total frequencies of expressed violence, men expressed more sexual abuse to their partner than women did.

Multiple regression analyses revealed that parent's attitude toward child had an effect on self-love for both genders. On the other hand, parental upbringing behavior had no direct influence on dating violence. For women, but not men, self-love had a negative effect on narcissism, and narcissism had an impact on expressed and received violence. It was suggested that narcissism correlates to aggression for women, because narcissism had more influence on expressed violence than received one.

In conclusion, it was suggested that the psychological factors including narcissism, self-love and perception of parental upbringing behavior have an effect on dating violence for women. Therefore, education to empower young people for nurturing self-love is essential to prevent dating violence. In addition, new methodology measuring psychological factors and effects of dating violence is required.